

ブナヴァインアート

◆筋をとおした“パーティション”

さまざまな情報が行き交う現代、わけでもインターネットの普及で瞬時に多数に情報を伝達できるようになりはしたものの、むしろ個人の意志はなかなか他者に伝えづらくなっています。他者と共生しながら、自己を確立するといったことを表現できないか——そういったことを考えていたところに、この仕事が舞い込んできました。

できあがったパーティションは、それぞれのブナ材がお互いにランダムに交錯しながら、まっすぐに伸びて、情報がさまざまな方向から交錯するイメージを表現できたかなと安堵しています。他者と交じりあいながらも、自らの意思を貫き通す姿を読み取っていただければありがたいと思っています。

高さ1m80cm、延長30m弱のパーティションの制作依頼を受けたとき、ブナ材でつくることができるか不安でした。ブナの単材は長くても2m、これをそれぞれ包み込みながら、強

度のあるパーティションをつくるにはどうすればいいか。これがまず第一の思案のしどころでした。

ある程度の厚みと強度、かつしなやかさをもたせなければならなかったからです。幸い、単板メーカーの協力で、ブナ+不織材+ブナ+不織材という4層構造の材料を作成してもらったことで、この問題は解決することができました。

足掛け3年の制作期間の中で、この材料の作成を含めて、構想に2年半かかりました。実際の制作では、やり直しのものを合わせて、28枚のパーティションをつくることになりましたが、これが悪夢のような半年でした。起きれば制作、寝るまで制作、最初に仕上げたものと最後にできあがったものとの釣り合い、また、イメージと手の触感を維持するのが大変でした。結局、どういうふうに取り組もうかと悩んだ最初に仕上げた2枚は、出来が気に入らず、作り直しました。最後になって、ようやくつくる楽しみを感じた次第です。

地元芸術家の参画

据え付けて、やっとほっとしました。このパーティションでは、枠の制作に木工屋さん、さらに土台への漆塗りに木地屋さん、あるいは漆の塗師さん、また、ランプシェードの制作では照明器具屋さんらと協働しましたが、みな成果が実ったものとなりました。

私もそうですが、みなとりたてて「伝統」を意識していません。むしろ邪魔だと思っています。しかし、できあがったものをつぶさに見てみると、この地に育まれた者の証が写されています。それがあからこそ、特異な素材を使っても、違和感なく受け止められるのだらうと思っています。

地域の素材を、この地に生きる者が使ってきたこれらのもので、なごんでいただいて、心静かなときを楽しんでいただければ幸いです。

武田孝三



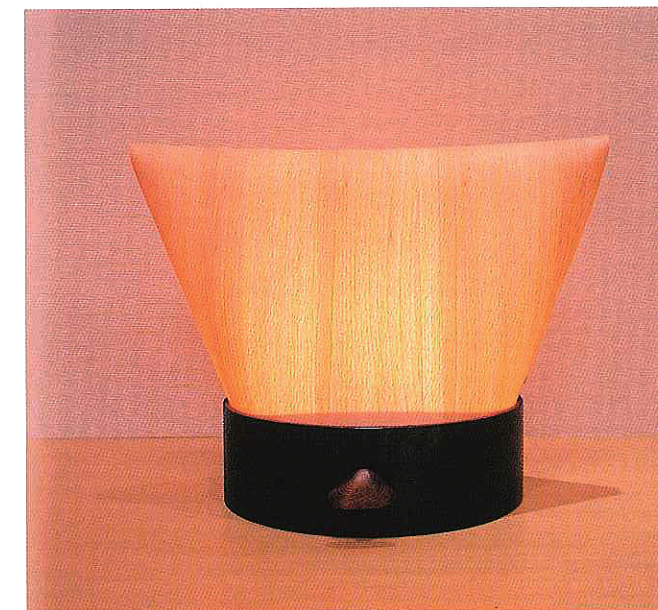
ブナパーティション（照明内蔵式）

E



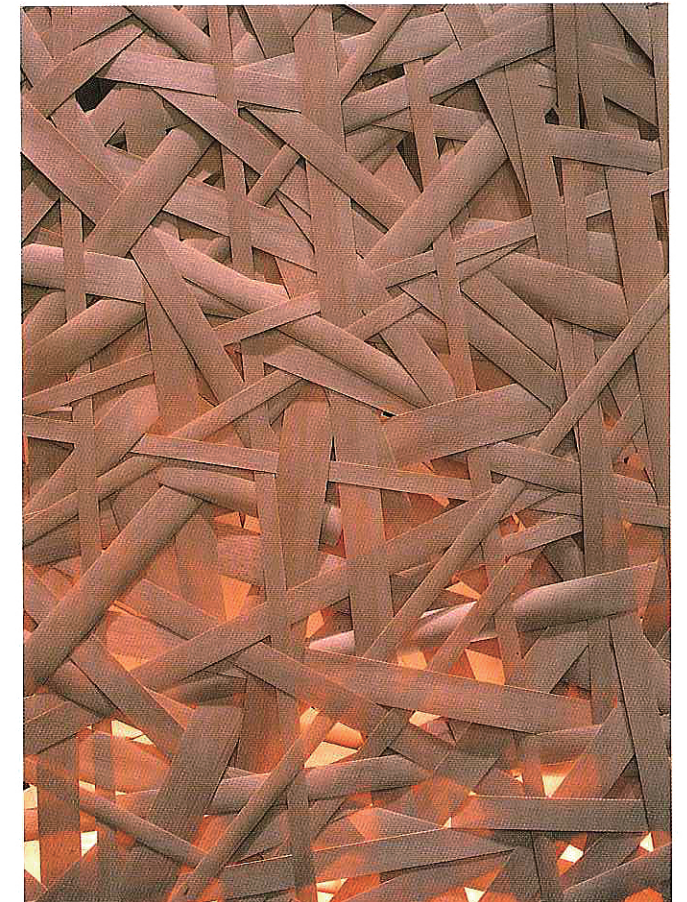
レストランのブナパーティション

E



ブナのランプシェード

E



ディテール

E